

28	神戸大学附属中等教育学校	H29～R1
----	--------------	--------

## 令和元年度研究開発自己評価書

### I 研究開発の内容

#### 1 教育課程

##### (1) 編成した教育課程の特徴

###### ① 「地理総合」について

「地理総合」では、中学校までに学習した地誌的な知識や見方と併せて、地球的課題の解決に寄与するために必要な知識・概念や地理的技能、「見方・考え方」の土台となる地球規模の自然システムや社会・経済システムなどを取り入れた。そのため、地球規模と地域規模の地理的事象や諸課題を扱う地誌的学習と地球的課題を地理的に考察する主題的方法による学習からなる「地理A」とは異なる。さらに、現代世界の地球的課題や生活圏の地域的課題に興味をもてるような主題学習のために、地球規模の自然システムのアプローチや社会・経済システムのアプローチを学習内容及び学習活動の両面で相互に関連付けて学習する「主題的相互展開学習」（2単位科目）とした。

学習内容として、大項目は「A地図や地理情報システムで捉える現代世界」及び「B国際理解と国際協力」「C持続可能な地域づくりと私たち」で構成し、これらの大項目は全体で5つの中項目から成り立っている。さらに、小項目に地理学習の中心的な概念である「位置や分布」、「場所」、「人間と自然環境との相互依存関係」、「空間的相互依存作用」、「地域」を着目する視点として盛り込み、国際社会に主体的に生きるグローバル人材として必要不可欠な、基礎的な知識が確実に学習できるよう構成した。具体的には「位置や分布」は地表面における位置や分布を、「場所」は自然環境・社会環境の特徴を、「人間と自然環境との相互依存関係」は人間の生活文化と自然環境との関わりを、「空間的相互依存作用」は地表面における人間の相互依存作用を、「地域」は地域がどのように形成され、変化するかを示す。

「地理総合」では、中学校の「動態地誌的な学習」を踏まえつつ、社会的事象の地理的な見方・考え方を働かし、上記「主題的相互展開学習」を実施することで、高等学校「地理歴史科」の目標達成に寄与する。また「系統地理的学習」「地誌的学習」の中に主題学習が配置される選択履修科目「地理B」学習の基盤科目としても位置付ける。

本校には「小集団学習」や「協同学習」の伝統があり、社会科及び地歴・公民科では、これらの理論や手法を用いた教材開発を行ってきた。こうした実践を踏まえ、本科目の指導にあたっては、言語活動を重視した探究的・課題解決的学習や地理的技能の強化に取り組む。

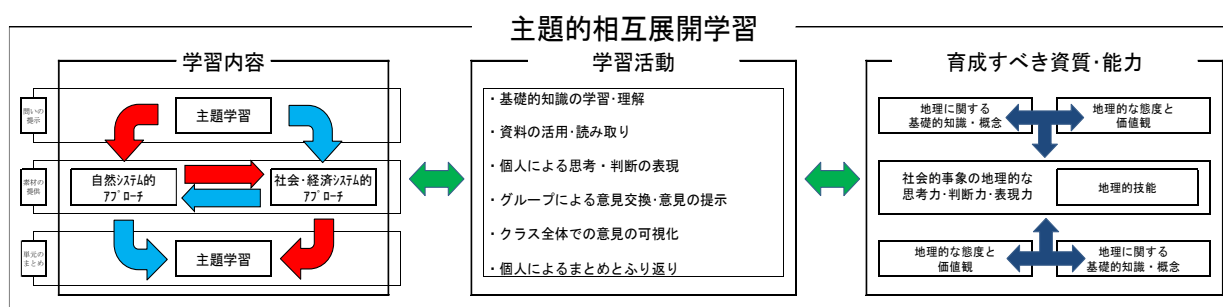


図1 「地理総合」イメージ図

###### ② 「地理総合」の内容構成

◇ 単位数 2単位

◇ 目標

社会的事象の地理的な見方・考え方を働かせ、地理に関わる事象や地球的な課題を追究したり解決したりする活動を通して、生活文化と自然環境並びに社会環境との関係及び空間的・歴史的な地域の変容とを関連付けながら、グローバル化する持続可能で活力ある社会づくりに主体的に寄与できる有為な形成者に必要な公民としての資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

(1) 地理に関わる諸事象について、概念などを活用して多面的・多角的に考察したり、地球的課題の解決に向けて地域という枠組みの中で構想したりする力、考察・構想したことを効果的に説明したり、それらを基

に議論したりする力を養う。

- (2) 地理に関わる諸事象について、持続可能で活力のある社会づくりを視野に、地球的課題への対応の方向性について模索するため努力を続けるとともに、多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される日本国民としての自覚、我が国の国土に対する愛情、世界の諸地域の多様な生活文化を尊重しようとするものの大切さについての自覚などを深める。
- (3) 調査や地理資料（地図や地理情報システム（GIS）など）から地理に関する様々な情報を効果的に調べ、口頭で説明したり、文章や図・表にまとめたりする技能を身に付けるようにする。
- (4) 地理に関わる諸事象に関して、地表面に展開する自然システムや社会・経済システム、生活文化の地域的特色などを理解する。

◇ 内容

A 地図や地理情報システムで捉える現代世界

- (1) 地図や地理情報システムと現代世界

B 国際理解と国際協力

- (1) 生活文化の多様性と国際理解
- (2) 地球的課題と国際協力

C 持続可能な地域づくりと私たち

- (1) 自然環境と防災
- (2) 生活圏の調査と地域の展望

③ 「歴史総合」について

「歴史総合」は、近現代に関わる諸事象について、世界と日本の相互関連及び融合的視点からとらえることで、「現代的諸課題」の形成に関わる近現代の歴史について能動的に学習する科目として構想している。

世界史と日本史の統一にあたっては、「現代的諸課題」の形成に関わる近現代の諸事象について、世界史の大枠の中に日本史を位置づける構成をとり、広く相互関連的な視野から捉えようとしている。内容構成は、独立した「単元」を骨格にすえた時系列的な歴史とし、いわゆる「通史」的スタイルはとらない。各単元は、学習者の主体性を重視した「主題的単元史学習」として編成し、各時を「課題設定」「資料と考察」「主題学習」の性格の異なる時間として組織するとともに、単元全体を概括する「主題学習」を設け、本校伝統の「協同学習」の手法を用いることで、「主体的・対話的で深い学び」を保障しようとしている。

「グローバル化する国際社会に主体的に生きる公民的資質・能力」に関しては、「主題的単元史学習」を通して、社会的事象の歴史的な見方・考え方を働かすことで、歴史的知識・技能の確実な習得、概念的・理解、思考力・判断力・表現力の育成を図ることで対応しようとしている。また、中学校社会科との関連性をふまえるとともに、5年時以降履修する選択科目「世界史B」「日本史B」の基盤科目としても位置付ける。

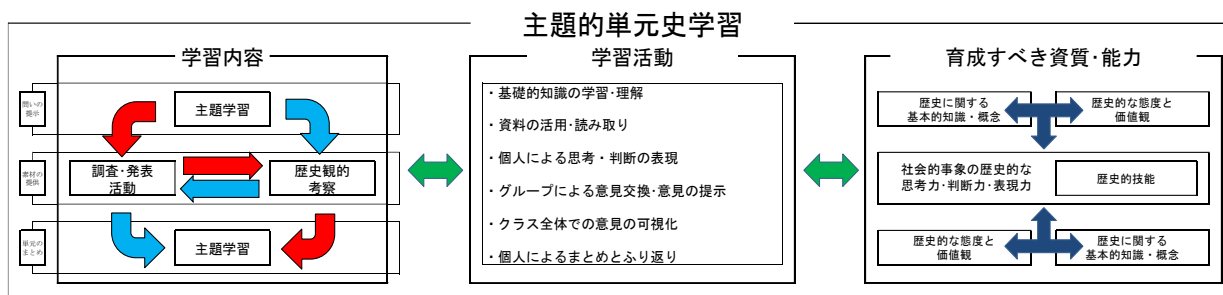


図2 「歴史総合」イメージ図

④ 「歴史総合」の内容構成

- ◇ 単位数 2単位
- ◇ 目標

社会的事象の歴史的な見方・考え方を働かせ、現代世界の諸課題を歴史的に追究し解決しようとする活動を通して、グローバル化する社会の中で広い視野と深い思考力を持ち、持続可能で活力ある日本と世界の構築に主体的に寄与できる有為な形成者に必要な公民としての資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 近現代の世界と日本の歴史的展開について、歴史の転換期を中心に、単元の基軸になる問を設け、比較による類似と差異、背景や原因などに着目して、諸資料や概念的知識を活用しながら、歴史的な事象の意味や意義、特色や相互の関連を多面的・多角的に考察したり、歴史的な事象を長期的視点から捉え、公正に判断し、効果的に説明したり、それらを基に議論したりする力を養う。
- (2) 近現代の世界と日本の歴史的展開について、歴史的に形成された諸課題を主体的に追究し、解決しようとする態度を養うとともに、伝統文化を尊重し、持続可能で活力ある日本と世界の構築に主体的に寄与できる有為な形成者に必要な公民としての自覚などを深める。

- (3) 近現代の世界と日本の歴史的展開に関する情報を、調査活動や諸資料から効果的に読み取り、図表や年表、文章にまとめ、発表・議論できる技能を身に付けるようにする。
- (4) 現代的諸課題の形成に関わる近現代の世界と日本の歴史的展開について、自由・制限、平等・格差、対立・協調、統合・分化、開発・保全などの歴史的な状況に着目しながら、世界と日本を広く相互的な視野から捉え、一体的に理解する。

◇ 内容

A 歴史の扉

- (1) 歴史と私たち  
 (2) 歴史の特質と資料

B 近代化と私たち

- (1) 近代化への問い  
 (2) 結び付く世界と日本の開国  
 (3) 国民国家と明治維新  
 (4) 近代化と現代的な諸課題

C 国際秩序の変化や大衆化と私たち

- (1) 国際秩序の変化や大衆化への問い  
 (2) 第一次世界大戦と大衆社会  
 (3) 経済危機と第二次世界大戦  
 (4) 国際秩序の変化や大衆化と現代的な諸課題

D グローバル化と私たち

- (1) グローバル化への問い  
 (2) 冷戦と世界経済  
 (3) 世界秩序の変容と日本  
 (4) 現代的な諸課題の形成と展望

(2) 教育課程の内容は適切であったか

① 実施前の期待値と実施後の感想を比較して

地理総合、歴史総合実施前の期待値と実施後の感想との比較を行った。期待値は4月に感想は10月に調査を行った。

	2019年度4月調査（期待する気持ち）				10月調査（実施後の感想）			
	主体的な学び		地理的技能		主体的な学び		地理的技能	
4 思う	41	37.6	36	33.0	19	17.6	36	33.3
3 わりと思う	59	54.1	60	55.0	69	63.9	62	57.4
2 あまり思わない	9	8.3	12	11.0	18	16.7	9	8.3
1 思わない	0	0.0	1	0.9	2	1.9	1	0.9

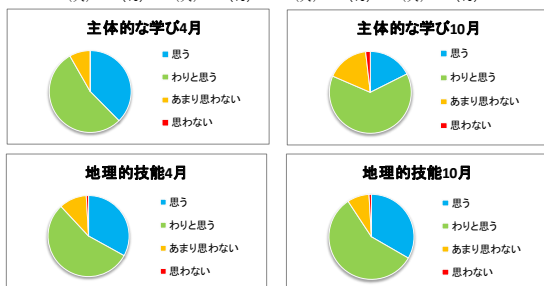


図3 地理総合の期待値と感想の比較

	2019年度4月調査（期待する気持ち）				10月調査（実施後の感想）			
	主体的な学び		歴史的技能		主体的な学び		歴史的技能	
4 思う	45	41.3	51	46.8	16	14.8	35	32.4
3 わりと思う	54	49.5	45	41.3	63	58.3	53	49.1
2 あまり思わない	10	9.2	13	11.9	26	24.1	18	16.7
1 思わない	0	0.0	0	0.0	3	2.8	2	1.9

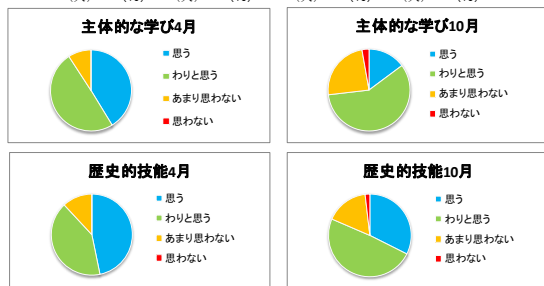


図4 歴史総合の期待値と感想の比較

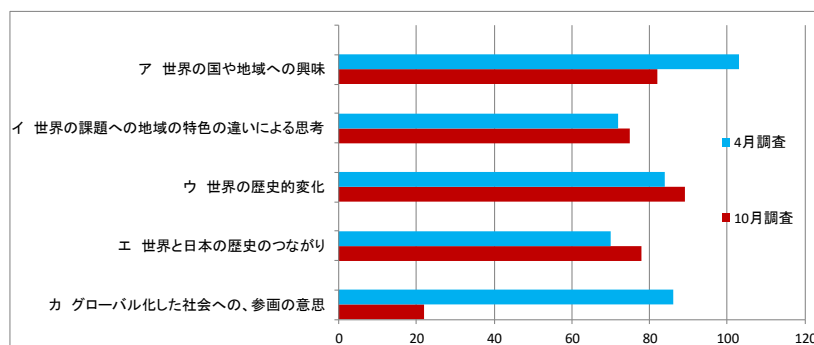
「地理総合」、「歴史総合」に期待する気持ちは、どちらの項目とも「歴史総合」の方が高い結果となった。今回の結果は「歴史総合」担当者が当該学年を中学校（本校では前期課程、以下省略）社会科で担当していることが要因である。しかし、「歴史総合」に期待する気持ちは高い傾向は、継続的に続いており、高等学校1学年における「地理総合」「歴史総合」に対する一般的なレディネスであるともいえる。

10月調査では、「地理総合」「歴史総合」間の差は見られなくなっており、「地理総合」における主題的相互展開学習、「歴史総合」における主題的単元史学習の共通点である主題学習の成果が出た結果である。特に、地理的技能、歴史的技能については、思う、わりと思うまでを含め、80%を超えていることから、「地理総合」「歴史総合」とも、年間の科目構成の前半で重視してきた、地理的技能や歴史的技能の育成をねらった単元構成における授業実践の成果が出たことを示す。主体的な学びについては、やや期待する気持ちを下回る結果となった。「地理総合」「歴史総合」とも年間計画の後半で、生徒の調査や事前の取組をもとにした主題学習を実践する構成となっており、年度末の調査では結果の改善が予想される。

## ② 学習項目について

教育課程の内容について確認するために、学習項目についての調査を行った。4月の調査は身に付けたい学習項目であり、10月の調査は身に付いた学習項目である。(複数回答可)

	4月調査		10月調査	
	(人)	(%)	(人)	(%)
ア 世界の国や地域への興味	103	59.9	82	48.2
イ 世界の課題への地域の特色の違いによる思考	72	41.9	75	44.1
ウ 世界の歴史的变化	84	48.8	89	52.4
エ 世界と日本の歴史のつながり	70	40.7	78	45.9
オ グローバル化した社会への、参画の意思	86	50.0	22	12.9



教育課程の内容について確認するための学習項目調査においては4月調査の結果を上回った項目が多い。特に、学習項目のイ、ウ、エについては4月当初の期待より定着した実感が高い。「イ 世界の課題への地域の特色の違いによる思考」と「エ 世界と日本の歴史のつながり」の項目は「グローバルな時空間認識」の根幹となる項目であり、最も意識して授業を行っている項目でもある。しかし、「オ グローバル化した社会への参画の意思」は下がっている。これは前期課程(中学生)と後期課程(高校生)の学齢の差が反映されていると思われる。社会への参画の意思は、学齢が上がるほど、より簡単に身についたと回答できないものとして、重みが増していることの表れである。

## (3) 授業時間等についての工夫

「地理総合」については、年度当初に教育計画を作成し、計画的に実践した。また、運営指導委員の要望などを踏まえ、一部の単元の実施を早めるなど、柔軟に対応した。「歴史総合」については、複数の担当者による実施となったが、定期考査ごとに調整し、概ね同様の実践を行うことができた。

## 2 指導方法・教材等

### (1) 実施した指導方法等の特徴

#### ① 「地理総合」について

指導方法等の前提として、生徒の探究的学習における主題設定にあたっては、地理的な見方・考え方(空間認識)を働かせ、主体的に取り組みやすい地球的課題を取り上げ、資質・能力の育成に努めた。また、持続可能な社会の担い手を育む観点から地球社会に対する関心を深めるテーマを取り入れ、現代世界と地域社会を関連させて考察しやすい構成とした。学習方法として、単元末のみならず、単元の途中にも主題学習を取り入れた。その過程における素材提供の場面でも積極的に資料活用や地図の読み取りなどを行い、地理的技能の育成に努めた。本校の前身である附属住吉中学校で伝統的に実施してきた「協同学習」を、後期課程にも「協同的な学び」として適用した。具体的には、基本的に4人1組のグループで活動し、各自の役割分担を明確にするとともに、個々に違う資料を配付するなど、一人一人の責任が明確になるように努めた。また、個人思考からグループ活動、学級全体での思考の可視化、個人のふり返り・改善の過程を通して、個人の取組が全体に活かされる指導を試みた。

#### ② 「歴史総合」について

指導方法等の前提として、生徒の探究的学習における主題設定にあたっては、歴史的思考(時間的思考)を働かせ、現代世界の諸課題を理解し、課題解決の糸口となるように、類似の歴史事象を積極的に取り上げて歴

史的思考力の育成に努めた。また、自国理解と国際協調の精神を養うことを重要な目標として、諸地域の文化や生活の独自性・主体性を尊重して異文化理解に努めるよう構成した。学習方法として、古地図、「ポスター」等の絵画資料、文字資料、統計資料等の諸資料を使って読み取りを行い、解釈・評価・討論等の言語活動を積極的に行うことで、歴史的技能の育成に取り組んだ。「地理総合」と同様に「協同的な学び」を適用するとともに、「歴史総合」の全体構想に基づき、単元史学習を4つの大項目構成として展開した。

## (2) 指導方法等は適切であったか

### ① 生徒参加型の授業について

生徒参加型の授業がその後のB科目の授業や知識、大学での学び、社会で必要な力の習得とどのような関係があるか調査を行った。なお、調査学年は今年度の「地理総合」「歴史総合」履修生徒ではなく、平成29年度に4年(高1)に在籍し、令和元年度に6年(高3)に在籍している生徒である。

「地理」と「歴史」ともほとんどの生徒が生徒参加型であると認識している。対象生徒が研究開発学校延長指定1年目(通算5年目)の生徒であり、ともに年間の単元計画も定まり、1年間を見通した授業実践ができていたことを示す。総合科目とB科目の関係における知識・技能の習得については「地理」と「歴史」で若干差がみられる結果となった。今回の対象生徒は「地理」「歴史」ともに、総合科目の担当教員とB科目の担当教員がそれぞれ違う集団である。したがって、より明確に、総合科目とB科目の関係性が表れている。今年度の「地理総合」「歴史総合」履修者から「地理総合」は、「かなりディスカッション類が多いが、歴史総合と違って回数が多くて一つ一つが小さい。個人的にはこっちの方が取り組みやすい。」「歴史総合」は、「大きなディスカッションがあり、かなり労力を要する。回数は少ないものの、下準備がかなりいる印象。」とアンケート回答があった。同じ生徒参加型の学習でも学習のスケールの違いが、学習時間における学習内容の増加するB科目での学びに影響を与えたといえる。しかし、これまでの調査も踏まえると、グループ活動などの生徒参加型の授業の実施は、生徒の知識・技能の習得が不十分になるのではないかという懸念は払拭される結果である。さらに、大学での学びや社会で必要な力についての調査結果も踏まえると、「地理総合」「歴史総合」のような総合的で深い学びは、大学進学後や社会で必要な資質・能力の育成に効果があるといえる。

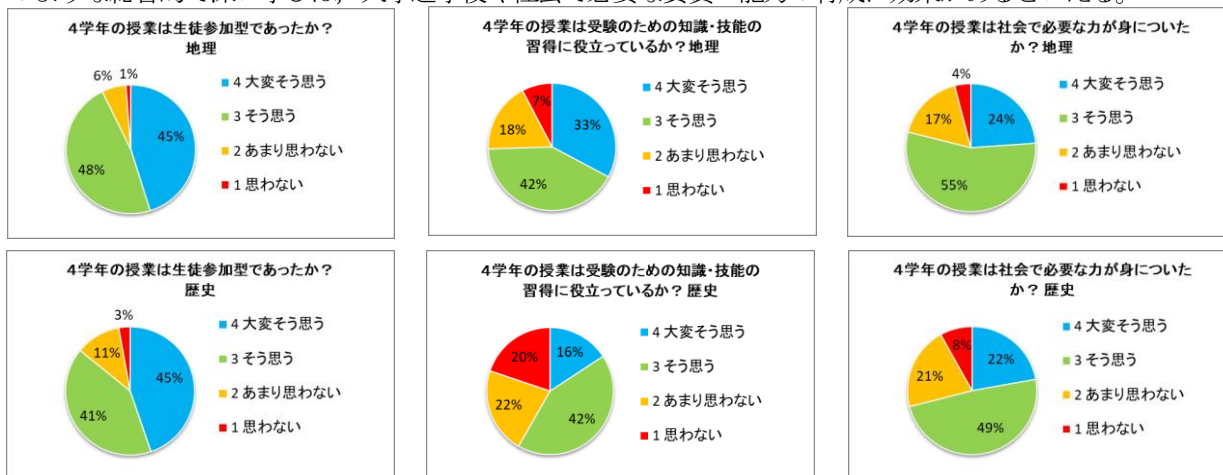


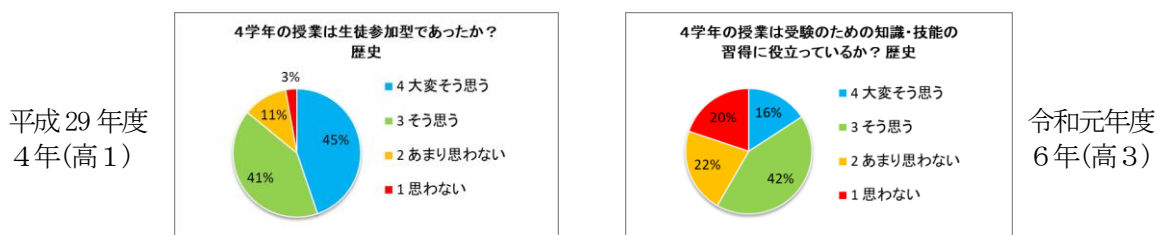
図5 授業形態の比較

図6 知識・技能の習得の比較

図7 社会で必要な力の比較

さらに、同じ歴史で比較した。平成24年度は研究開発指定前であり、講義形式による世界史Aの授業を実施した。平成25年度は研究開発初年度であり試行期間として部分的に生徒参加型を意識した世界史Aの授業を実施し、平成26年度から全面的に生徒参加型を意識した「歴史基礎」の授業を実施した。また、平成29年度から「歴史総合」に名称を変更し実施している。

授業形態については全面的に生徒参加型を意識した授業形態を展開した平成28年度が生徒も最も高く生徒参加型と認識している。また、4学年の授業が最も生徒参加型であったと認識した学年が最も受験のための知識・技能の習得に役立っていると認識している結果となった。



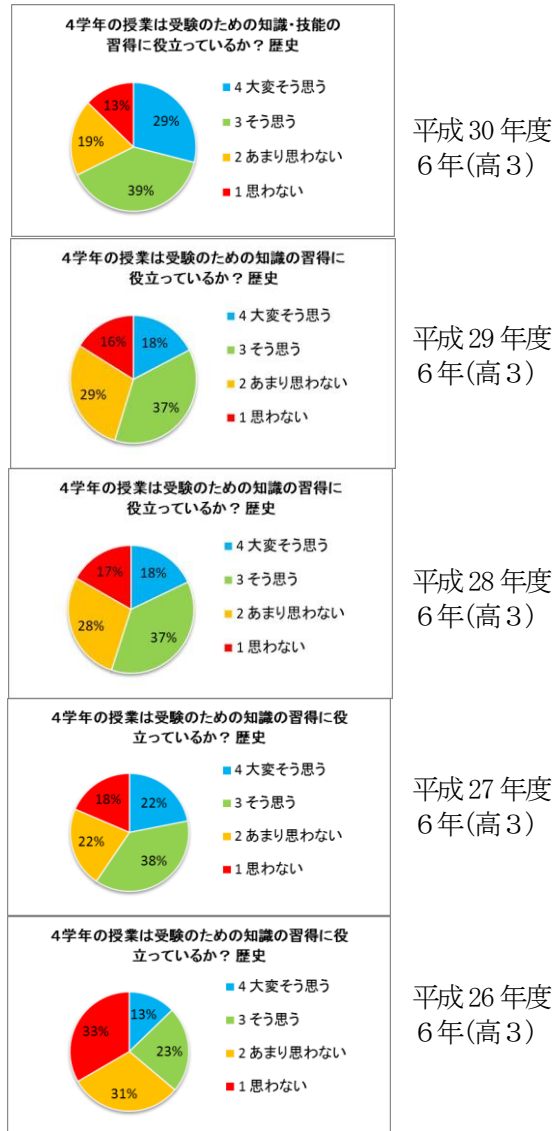
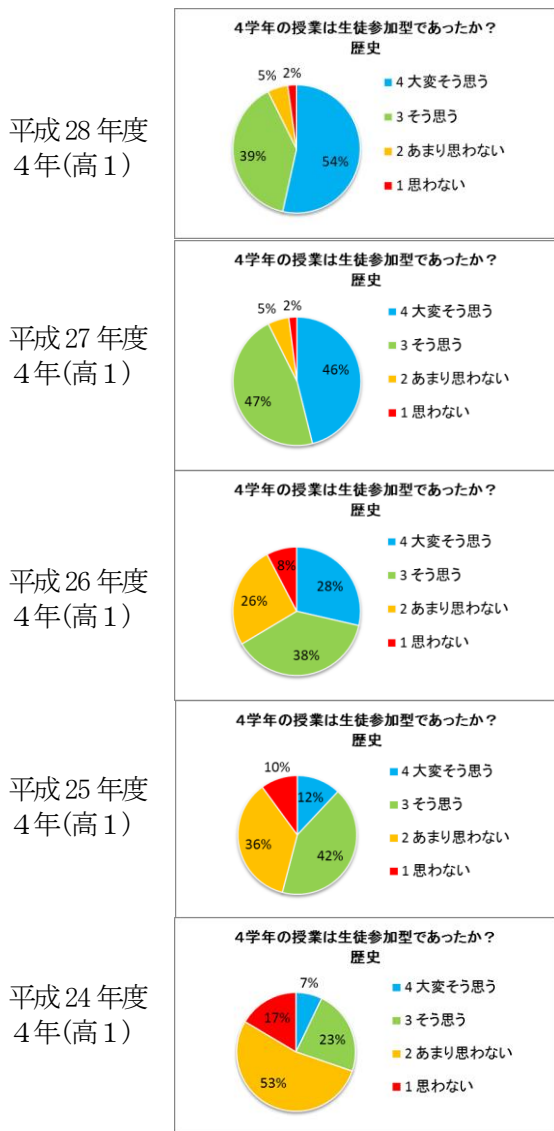


図8 歴史の授業形態の比較

図9 歴史の知識・技能の習得についての比較

## II 実施の効果

### 1 児童・生徒への効果

#### ① テキストマイニング分析から

授業の感想を中学校社会科と「地理総合」「歴史総合」のそれぞれの項目で記述させた。アンケート実施は平成31年4月と令和元年10月で対象となる生徒は同じ集団である。

名詞		動詞				形容詞					
中学地理	地理総合	中学地理	地理総合	中学地理	地理総合	中学地理	地理総合				
2019年4月	2019年10月	2019年4月	2019年10月	2019年4月	2019年10月	2019年4月	2019年10月				
気候	20	地理	49	覚える	37	できる	49	多い	25	面白い	20
世界	16	授業	31	できる	34	わかる	34	楽しい	17	楽しい	19
理解	16	理解	22	知る	14	思う	26	面白い	12	多い	14
日本	16	気候	20	考える	13	考える	24	苦手	10	難しい	10
地域	14	地域	16	わかる	9	学ぶ	16	好き	10	良い	9
地理	14	世界	14			知る	15			深い	9
暗記	12	前期課程	13			覚える	11			様々	8
授業	12	要因	13			感じる	10				
地図	10	興味	12								
学習	10	説明	12								
興味	9	理由	11								
内容	9	内容	10								
文化	9	暗記	9								
知識	8	自分	8								
		知識	8								
		文化	8								

図10 地理的分野と地理総合における授業の感想中の語句の登場数の比較(数値は回数)

名詞「授業」では、授業内容および授業に対する感想が書かれており、「前期課程の時は地理に興味を持てなかったが、後期課程で地理総合の授業を受けたことで、前期課程の時より興味を持った。」「前期課程でも授業を受けてきたが、詳しく理論的に学んだのは初めてだった。ニュースや気候もより理解できるようになった。」など、ともに出現回数が増えている「興味」「理解」が深まる記述が見られる。名詞「暗記」、動詞「覚える」が学習前に比べて減少し、「考える」が増加しているのは、例年見られる変化で、地理総合の授業の特徴が表れている。形容詞「難しい」に関しては、「論理的に問題を解き、記述も多いことから、暗記ではなく、理解しないと解けないので難しいけれど理解は深まった。」「暗記は多いしよくわからないし大変だし難しいけれど、今まで「なんとなく」やってきたことが「しっかり」とみえてきてこれが地理なんだと思った。」などの記述に見られるように、手応えを感じている様子が、「苦手」が減少していることから読み取ることができる。

名詞		動詞				形容詞					
中学歴史	歴史総合	中学歴史	歴史総合	中学歴史	歴史総合	中学歴史	歴史総合				
2019年4月	2019年10月	2019年4月	2019年10月	2019年4月	2019年10月	2019年4月	2019年10月				
歴史	32	歴史	51	できる	40	考える	43	楽しい	19	難しい	27
授業	23	世界	49	覚える	21	できる	37	面白い	15	面白い	19
流れ	21	日本	35	学ぶ	15	わかる	31	多い	10	深い	13
理解	19	理解	25	わかる	15	思う	19	好き	10	楽しい	11
時代	17	つながり	16	考える	14	感じる	15			多い	11
興味	10	流れ	15	知る	12	覚える	14				
		授業	12	思う	10	知る	14				
		内容	10			つながる	10				
		国	10			つなげる	10				

図11 歴史的分野と歴史総合における授業の感想中の語句の登場数の比較(数値は回数)

地理総合と同じく、例年見られる傾向として、名詞「暗記」動詞「覚える」が減少している。名詞「つながり」、動詞「つなげる」「つながる」、「深まる」「深める」の増加、さらには「考える」の頻出は、歴史総合の授業がどのように行われているかを明確に表している。形容詞では「難しい」の出現回数が最も多く、他の年度と比較しても多い。記述からは、「文章や史資料を読みとる」、「様々なことがつながっていることで複雑」「日本と世界を関連付ける」「人と討論する」など難しさを感じている様子が見られる。しかし、その段階を経た上で、「暗記するだけの授業よりははるかに面白い」「流れを理解できるようになると楽しくなった」「世界と日本の歴史を様々な情報・資料から読み取って、繋ぎ合わせるということ多くして、難しいけれど、つながりを導き出すというところが面白い」といった記述も多く見られ、今後の授業を通して、どのように変化するかを期待したい。

## ② 共起ネットワーク分析から

授業の感想を中学校社会科と「地理総合」「歴史総合」のそれぞれの項目で記述させ、語句の共起(共出現)パターンをネットワークマップとして表現した。アンケート実施は平成31年4月と令和元年10月で対象となる生徒は同じ集団である。

共起ネットワークとは抽出語を用いて、出現パターンの似通った共起関係を線で結んだ図である。それぞれの語がネットワーク構造の中でどの程度中心的な役割を果たしているかを示す媒介中心性をとっている。また、出現頻度の多い語句ほど大きな円で示した。中学校社会科地理的分野は日本や世界を知ることが楽しいが、覚えることが多く苦手だとも感じていた。「地理総合」は様々な現象の起こる理由を考えることが楽しいと考えている。中学校社会科歴史的分野は歴史の流れを学ぶことが楽しいなど授業は面白いが、覚えることが多いとも感じていた。「歴史総合」は世界と日本の歴史について考えることで理解が深まると認識されている。

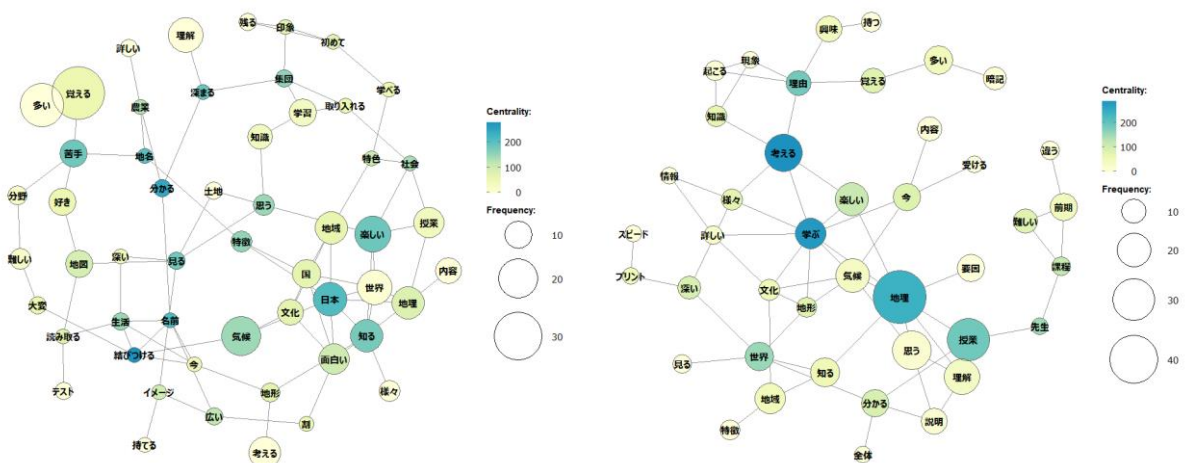


図12 地理総合における授業の感想中の語句の共起ネットワーク分析(左が4月調査、右が10月調査)

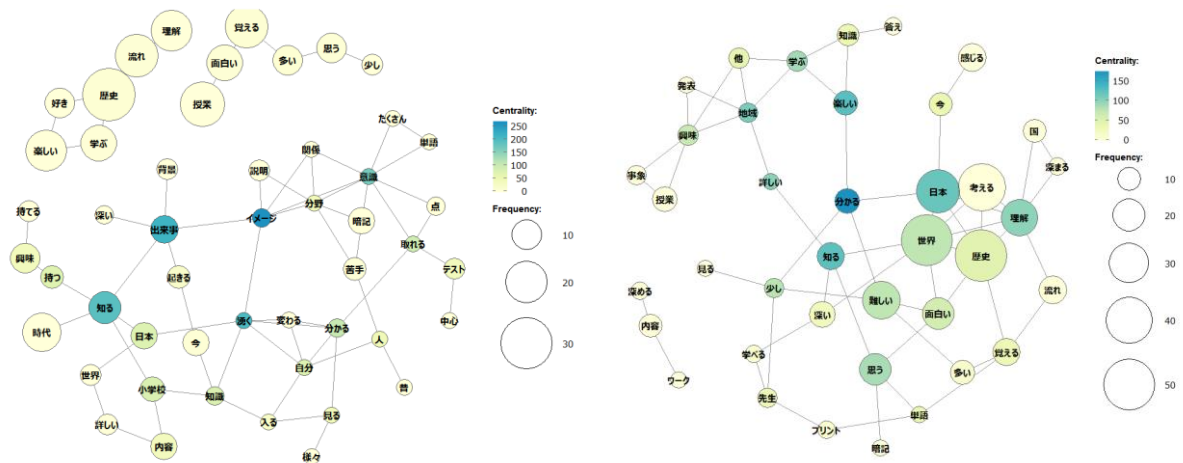


図13 歴史総合における授業の感想中の語句の共起ネットワーク分析(左が4月調査, 右が10月調査)

## 2 教師への効果

定期的に校内研究委員会を実施し、「地理総合」及び「歴史総合」について検討を重ねること自体が、教員としての資質・能力を向上させる良い機会となった。さらに、年齢構成のバランスの取れた地理歴史科の教員団から出た、それぞれの年齢層に応じた建設的な意見の融合を図ることで、様々な学校現場でも実施できる科目の開発につながった。また、運営指導委員をはじめ、様々な学識者及び現場教員のご意見をいただくことにより構成した「地理総合」及び「歴史総合」は、現場の教員だけでは発想できない内容であると同時に、十分に高等学校の現場で実施できるものになっている。

今年度は第2回運営指導委員会にて北海道釧路商業高等学校の嶽山敏嗣教諭に「地理総合」、東京都立府中高等学校の大木匡尚主幹教諭に東京都立農業高等学校所属時の「歴史総合」の部分的実践の報告をしていただいた。その中で、それぞれの学校に応じた学習課題を選定し、その学習課題をどのように授業に取り入れるかを、授業者が工夫することが重要であることが共有された。このように、本校以外の全日制普通科以外の高等学校での実践の中で、「地理総合」「歴史総合」の汎用性の検証が進むと同時に、これからの高等学校地理歴史科における「地理総合」「歴史総合」の必要性やこれから検証していくべき課題が明確になった。

## 3 保護者等への効果

本校の保護者は、教育に関心が高く、本研究についても理解していただき、多大なるご協力をいただいた。全国から研究者や高等学校の教員などをはじめとする多くの方々に授業を見学していただくなど、本校の教育活動に関心を持たれること自体が、本校の保護者の要望と一致するところであり、今後もさらなる協力が期待できると考えている。

また、今年度は「地理総合」の授業を家庭でも話題にしているかを調査した。35%の家庭で授業の内容を話題にするなど、教科の学びの家庭への波及効果がみられた。「地理総合」では地球規模の地理的な課題を「歴史総合」では現代世界の諸課題を扱う。これらは、各家庭で話題になるべきテーマであり、これらを探究的に学ぶことは、授業内だけでとどまらない学習である。この点からも、「地理総合」や「歴史総合」を学ぶ有用性が明らかとなった。

## Ⅲ 研究実施上の問題点と今後の課題

### 1 全体を通して

グローバルな時空間認識を通したグローバル人材としての資質・能力の育成を目指し、発達段階を踏まえた地理・歴史学習の再構成を行った。その結果、「地理総合」を現代世界の地球的課題や生活圏の地域的課題に興味をもてるような主題学習のために、地球規模の自然システム的アプローチや社会・経済システム的アプローチを学習内容及び学習活動の両面で相互に関連付けて学習する「主題的相互展開学習」(2単位科目)とした。また、「歴史総合」は、各単元を学習者の主体性を重視した「主題的単元史学習」として編成し、各時を「課題設定」「資料と考察」「主題学習」の性格の異なる時間として組織するとともに、単元全体を概括する「主題学習」を設け、本校伝統の「協同学習」の手法を用いることで、「主体的・対話的で深い学び」を保障しようとする科目とした。「地理総合」「歴史総合」ともにトータルプランを構成し、年間指導計画を作成するとともに実践した。



グローバル人材を本校ではグローバルキャリア人と呼び、知識・技能だけでなく、思考力・判断力・表現力等や主体的に学びに向かう態度などの資質・能力が備わった人材としている。「グローバルな時空間認識」を通して資質・能力を育成する際に、社会的現象の地理的・歴史的な見方・考え方を働かせることを重視し、協同的な学びによる調査・発表・討論学習などを実践した。その結果、生徒意識調査から授業への興味が高く、学習内容においても世界の課題への地域の特色の違いや世界と日本の歴史のつながりが定着している生徒が多い結果となった。さらに、グローバル人材として必要な思考力や判断力、表現力等の資質・能力を育成するために「地理総合」「歴史総合」ともグループ学習を中心とした生徒参加型授業を多くの学習活動で取り入れた。生徒意識調査から生徒参加型授業には概ね好意的な結果となった。また、「歴史総合」において、年々生徒参加型授業であると認識する生徒の割合が上昇するなど、「地理総合」「歴史総合」の授業スタイル像は定着したといえる。また、生徒への意識調査やアンケート、運営指導委員会や研究発表会参加者からの意見などを総括すると「地理総合」「歴史総合」の両科目を履修し、主題学習を中心とした生徒参加型授業に取り組むことは、「グローバルな時空間認識」が高まるとともに、グローバル人材育成につながると立証できた。

しかし、本校以外での実践においても同様の効果が得られるかどうかについては懐疑的な意見も多かった。そこで、本年度は県外の公立高等学校の専門学科での部分的実践の報告を行った。その中で、高等学校地理歴史科における「地理総合」「歴史総合」の必要性和効果および今後の実践にあたって想定される課題について共有することができた。

さらに、中学校社会科の分析、検証をもとに「地理総合」「歴史総合」の単元や年間指導計画などの構成を行った。「地理総合」「歴史総合」の公開授業の際に寄せられた助言や意見などからは中学校社会科と地理歴史科各B科目をつなぐ科目としての有効性を指示する声が多数であった。そこで、「地理総合」担当者が、地理Bを同時に担当し、「歴史総合」担当者が中学校社会科歴史的分野をもう一方の「歴史総合」担当者が世界史Bと日本史Bを同時に担当した。そこで、中学校での学びを、4学年の「地理総合」「歴史総合」でどのように活用し、さらに、「地理総合」「歴史総合」での学びを「世界史B」「日本史B」「地理B」の授業でどのように展開できるかを実践し、検証した。その中で、学齢の違いによって、働かすことのできる社会的な見方・考え方に違いがあり、その違いによって、育成される生徒の資質・能力深さと広がりには違いがあることがわかった。

このように、科目自体への評価と科目の実践に対する評価の研究開発は進んだが、生徒の学習評価については不十分な検証となった。学習評価は毎時の授業実践で見取ることができるものではなく、単元などのまとまりの中で、変容を見取る中で評価することができる。資質・能力の育成を見通した学習内容や学習活動などの年間指導計画が概ね整うまでは、評価の場面の設定が困難であるため、十分な検証までには至らない。また、資質・能力の育成を目指す「地理総合」「歴史総合」の部分的実践の報告による汎用性の検証は進んだが、「地理総合」「歴史総合」全体を見据えた実践でなければ、学習評価の部分的実践による汎用性の検証は不可能であることも明確となった。

## 2 課題解決のための具体的な方策

評価には科目の目的や単元構成などの科目自体への評価とともに、科目の実践に対する評価と科目の実践によって資質・能力が育成されたかを評価する生徒への評価の3つに区分される。科目自体への評価と科目の実践に対する評価は、科目の学習内容における年間指導計画や単元構成の研究開発が進み、資質・能力の育成のための生徒参加型の学習活動が定着するとともに、継続的に高い評価がみられるようになり「地理総合」「歴史総合」全体への評価につながるものとなった。しかし、いわゆる学習評価とよばれる生徒への評価については、その評価方法の開発や実践において不十分な検証にとどまった。資質・能力が育成されているかを評価する学習評価は学習内容・学習活動と一体的なものではあるが、その変容は毎時の授業実践で見取ることができるものではない。単元などのまとまりを通した変容、時には単元と単元をつないだ活動の中での生徒の変容を記録し、比較することによってはじめて見取ることができる。したがって、学習内容と学習活動のトータルプランの開発と並行して、生徒を評価することは不可能であった。しかし、資質・能力の育成を見通した年間指導計画が整い、ようやく、資質・能力の評価について実践的な研究開発を進める環境が整った。そこで、研究開発課題を「グローバル人材育成に向けて、地理歴史科を再編成して「地理総合」「歴史総合」(必履修科目)を設置し、中高一貫教育課程に位置付けながら、その学習内容と学習活動、学習評価について研究開発を行う。」とし、評価の中でも学習評価に焦点をあてた研究を進めていく。その中で、単元と単元のつながりを意識した年間指導計画の中で、資質・能力の変容を把握し、評価する方法を提示する。その際に、評価規準となる観点を変更する。本校の研究開発では資質・能力を知識、技能、思考・判断・表現、主体的に学びに向かう態度の4つの観点として設定していた。実際に学習評価を行う際に、同じ評価の場面で知識の定着と技能の習得を評価することが困難であったからである。しかし、技能を知識などを調べまとめる技能として再定義し、知識・技能、思考・判断・表現、主体的に学びに向かう態度の3つの観点として再区分し、学習評価の研究開発に取り組む。

さらに、本校以外の高学校の協力者に依頼し、「地理総合」や「歴史総合」の部分的実践ではなく、それぞれの科目を見据えた実践の中で、資質・能力の変容を見取ることによる学習評価の部分的実践を通して、そ

の汎用性を検証する。なお、本校以外の高等学校の協力者の部分的実践については、あくまでも学習評価の部分的実践であり、最終的な学習評価は現行の学習指導要領における4観点にもとづく学習評価になることを踏まえ依頼する。

資質・能力の変容を見取る観点別の学習評価については、不慣れな高等学校が多いことが予想される。そのため、最初の1年間を本校での実践の周知期間とし、2年目に本校以外の高等学校の協力者に依頼する。